

資 料

「英文講読」指導の覚え書

浜 口 み づ ら

はじめに

短期大学の2カ年の課程はいかにも短い。指導する側にとっても、指導の不十分さの一因は、期間の短さにあると毎年痛感させられるのであるが、指導される側も、何やら掴みかけた時点で、最終の学生生活にわかれを告げることにもの足りなさを感じていることも事実である。しかしながら、現行の制度のもとで、教育の効果を最大限にあげるためには、まだまだ考えるべき余地が多く残されているように思われる。

例えば、カリキュラム編成上の問題、教科目の内容の問題等は、短期大学一般としてではなく、特定の大学、特定の学科（例えば、英文学科、家政学科、児童学科等）の中で、すでになされている実践を基にして検討を加える時期にきていると見受けられる。抽象的な理想論ではなく、二年間担当した一教科目を手始めに、事実即した考察を展開して、多くのご意見をいただくための一石を投じたいと思う。

女子短期大学（英語科）における「英文講読」について

「英文講読」という教科目は、旧制専門学校、大学の時代から存在する教科目である。それだけに、指導する側も、それぞれが受けた学習体験が強いイメージとしてまわりつき、新制度のもとの教科目としての位置づけなり、指導

目標はまだ十分に確立されていない観がある。また、とくに、戦後生れの短期大学における「英文講読」の目標や指導内容については、それが配当される学科によってそれらが変わってくるという複雑さも加って、論議は多岐にわたると予想される。そこで、今回は、短期大学の英語科における「英文講読」、中でも本校における「英文講読」という限定のもとに話しをすすめていきたい。

「英文講読」は、英文法、英文作法、オーラル、英語音声学演習、スピーチと並んで、専門教科目の一つである。従って、「英文講読」の目標や内容の設定にあたっては、これら他教科目の有機的関連を必要とする。幸い、他の教科目は、かなり明確な目標とその指導内容が想定され得る。いちばん不明確なのが「英文講読」であるといつてよいであろう。そこで他教科目との関連において、どんな任務を「英文講読」に負わしたらよいか、という一見逆算的な位置づけをしてみてもどうかと考えた。

「英文法」は英語の文法に関する知識の習得とその運用能力の強化、「英文作法」においては、文字による英語表現力の伸長、「オーラル」においては、口頭による英語表現力の練磨、「英語音声学演習」においては、英音に関する知識の習得とその実際運用能力の訓練、「スピーチ」においては、やや高度の発話訓練。極めて大ざっぱであるが、このように各教科目の特長を並べてみて気付くことは、それぞれの教科目が遠心的に働いて、すべてをまとめて生きた人間のことばとし、学習者を総体として involve させる教科目の見当らないことである。それならば、「英文講読」をそのような教科目として位置づけ、指導内容もそれに沿ったものにしていくことはできないものだろうか。

このような考え方を出発点として、「英文講読」の仮建築を私案として提示してみよう。

1. 「英文講読」の特質

他の専門教科目を統合するもの

2. 指導内容

- 教材の音読
- 英単語の理解＝単語の関連づけ

「英文講読」指導の覚え書

同意語 反意語 派生語

- 文法に基く解釈
- 英語の表現と日本語の表現の対比
- 言語表現としての解釈に留らず意味の理解
- 文によっては鑑賞

(これら指導内容は、ただちに学習者の学習活動ともなる。)

上記の私案は、この一年間、すでにひそかに実践してみたことである。

当然のことながら、目標をもった指導からはさまざまなことが明瞭に浮びあがってくる。

1. まず、個々の学生の実態の明確化である。鑑賞力は優れているが、音声面に弱いもの、音声面ではすすんでいるのに、文法力を欠くもの等、各学生の英語力のプロフィールが描けることである。こうなると、週三時間という「英文講読」の中で、各学生の能力のアンバランスを調整していくことも可能だし、努力を必要とする領域の教科目をサジェストすることもできて、学生との密着度は高まってくる。

2. 前項に関連して、他教科目への関心の目が開かれる。「英文法」ではどのような指導を受けているのか、「オーラル」ではどんな活動をしているのか、無関心ではいられなくなってくる。先に述べた専門科目間の有機的関連づけを望まずにはいられなくなるのである。これは、結果として専門教科担当者間のコミュニケーションの樹立という方向へむかっていく。本校のような小規模校において、また、個別指導を尊重する方針をとっている短期大学として、このことは欠かすことのできないものである。ひとりの学生も落ちこぼさないための細かい網の目を教師によって編み出していかねばならない。

3. さらに、教材(テキスト)選定にあたって、照準が定ってくる。洪水のように出版される大学用英文教材の中から、年間2冊のテキストを選び出すことは、容易なようで、よく考えると、なかなか難しい。小説あり、随筆あり、評論ありする中で、教科目標さえはっきりしていれば、選出はそれだけ容易に

なる。先に述べた「英文講読」の特質から、若い学生の心をゆさぶり、他教科目で習得した能力を活用して充分理解される教材ということになるであろう。とくに、本校のカリキュラムからみて、まとまった英文を読む機会は少ない。フィクションであれ、ノンフィクションであれ、思考や訴えの裏付けのある英文をみっちり読み、かつ考えるところまでを是非「英文講読」においてさせたいと願う。専門教科目の中でそのようなことのできるのは、「英文講読」を聞いてほかには見当たらない。

今後に期待すること

短期間の経験をもとに、粗雑な考察で恐縮であるが、今後の討議の材料として、いくつかのことを提示してみたい。

1. 各教科目内の連絡調整

同一教科目が異なる教師によって指導される場合、いい意味での教師の持味は充分発揮されてよいが、一定の基準がなければ、学生間に一種の不安をかもし出す。従って、異なる教材、異なる指導方法であっても、一教科目として統一を保つ方策は講じておかなければならない。とくに問題を感じるのは評価についてであるが、これはかなり大きな問題であるので別の機会に検討してみたい。

2. 先に述べた「英文講読」の仮說的定義からすると、この教科目の担当者は専任教師であることが望ましい。なぜならば、「英文講読」を指導するにあたっては、少なくとも本校カリキュラムの専門科目について全貌を知り、また、他教科目との連絡調整が容易であることが必要だと考えるからである。非常勤の方にそこまで要求することは失礼な気がする。

3. 8か年の英語教育を考えるプロジェクトチームの編成

中学校・高等学校のある短期大学として、中・高・大の一貫性を考慮した指導方針を編み出すことは、各段階にとって有利に働くと考えられる。中・高における学習指導要領の改訂は、ただちに短期大学の教育に影響を及ぼす。過去

「英文講読」指導の覚え書

の教育をふまえた指導でなければ、短い期間の指導も効果がうすい。そうした意味からも、本学院英語教育プロジェクトチームの生れることを望むのである。

む す び

時代は流れ、新しい教育制度もつぎつぎと生れてきている。これから認可されようとしている専門学校と短期大学の区分はどこでどうつけられるべきであるのか。社会はどのような学校教育を望んでいるのか、本校のかかげる目標の何に魅かれて学生は入学を希望してくるのか。こうした問題は、単に一教科目を教える教師といえども、関心をもたずにはおられない。というよりも、こうした問題を視野に入れつつ一教科目を教えるのでなければ、安心して教壇に立ってられないというのが実感である。漠然とした共通理解から、多少ギクシヤクしてもいい、意見を充分に交し合った末の一応の結論に達してみる必要がある。実践と、その結果による修正の繰り返しこそが前進をもたらすのだと信じて、これからも小さな試みを続けていきたい。